

ルワンダ 千の丘の映画祭「Hillywood」レポート

この4月でルワンダ虐殺から14年がたったこととなります。14年という年月があつた歴史を「歴史」としてしまふのに十分な時間なのかどうかは分かりません。欧米では「ホテル・ルワンダ(原題“Hotel Rwanda)」、「ルワンダの涙(原題“Shooting Dogs)」といった映画も制作され、日本でも公開されて話題となりました。それらは私たちにあらためて問いかけました。「ルワンダ虐殺とは何だったのか」と。しかしそれらは欧米の視点からのものです。ルワンダの人たちは今も、「何だったのか」と問い続けています。それをルワンダの映画人が映像として形にしています。3月にルワンダの映画人によってルワンダで開かれた映画祭の様子を、5月に横浜で開催される「シネマアフリカ2008」実行委員会の吉田美穂さんから報告してもらいます。

シネマアフリカは、「アフリカが語るアフリカを日本へ」をコンセプトに、アフリカ人によって作られた映画を日本へ紹介する団体で、昨年は東京で「シネマアフリカ2007 - ルワンダの記憶 -」を開催した。また「アフリカからの映像直行便」というモットーで、欧米でセレクトされた作品を輸入するのではなく、アフリカ各地の映画祭に自ら出向き、作品を選び、収集している。

昨年の映画祭にルワンダからエリック・カベラ監督を招いた縁で、今年はルワンダでの映画祭に、代表の吉田がゲストとして参加することになった。ルワンダ映画祭は、若手映画人を養成する現地NGO「ルワンダ・シネマ・センター」(以下RCC)によって企画運営されている映画祭で、今年で4回目を迎える。今年3月16日から30日に開催された。前半1週間の地方巡回上映会と、後半1週間、首都キガリの各所で開かれる上映会の2部によって構成されている。アメリカの映画産業の聖地Hollywoodとルワンダの美称「Land of thousands of Hills」をかけて、別名「Hillywood」とも呼ばれる。

はMTN社祭り！映画祭自体のもっと立てないと！」と息巻くと、RCCのカベラ氏は「でも一本数百ドルもするんだ」と、茜色に染まるのどかな風景を背に、実に現実的なやり取りに盛り上がる。どこの国でも予算やスポンサーとの関係は大きな関心事だ。



上映開始を待つ観客

会場には既に数百人の人々が集まり、前座のバンドの演奏に身を揺らしている。大型バスやバイク、自転車などが次々到着し、広場は動き回るのが難しいほど。観客はバイクにまたがったり、自転車の荷台に上ったりと各々ベストポジションを確保しようと格闘している。



野外上映会準備風景(ルワマガナ)



映画祭の宣伝カーを追いかける子どもたち(ルワマガナ)

今回の目的のひとつは、地方巡回上映会に行くことだ。今年は、ニヤガタレ、ルワマガナ、ギチュンピ、ルバブ、ムサンゼ、カロングウェ、フエの7都市をまわった。その内の1日を紹介してみたい。

キガリから2時間ほどのニヤガタレに着いたのは、日も落ちかけた頃。町に入ると、協賛企業MTN社(アフリカの大手携帯電話会社)の黄色いノボリが多数見えてくる。ドイツからのゲスト、ヒューマン・ライツ・ウォッチ映画祭のディレクターが「これで

18時から21時まで5本上映のプログラムで、最初の一本は、「Better In」。虐殺に加担した自らの罪に慄き、刑務所をでることを躊躇する男の物語。身近で切実な物語ゆえか、みな沈黙の中、

映画に集中している。虐殺事件関連の映画もいくつか上映されたが、切実過ぎる物語は、時に観客の沈黙を呼び起こし、スタッフは、常に観客の反応を非常に気に配っていた。ラストシーンは満場の拍手で終わった「壁をこえて - わたしたちみなルワンダ人」でも、武装勢力の学校襲撃シーンでは、あちこちで大きな嘆息、息を呑む声が聞こえる。そんな群衆の反応に耐えかねるように、「ごめんね、みんな、嫌な思いをさせているね」としきりに観客に話しかけていたカベラ氏の姿は印象的だった。



ルワンダ映画祭ディレクターのエリック・カベラ監督

近年、様々な映画が生まれているルワンダだが、その原動力をこの野外映画祭に垣間見た。かつて南アフリカの映画祭で出会ったルワンダの若手監督は「そんなに単純じゃないけど」と前置きしながら、「ルワンダでは映画が社会を変える一歩になり得る」と語ってくれた。かつてこれほど、地域に密着している映画祭は見たことがない。社会の問題を、その中で生きる若者が映画にし、コミュニティの中で上映し、反応を肌で感じ取り、次の作品に生かす。良い意味での相互関係がそこには成り立っている。



スチール写真を撮影する女性カメラマン

二番手の「The Consequences」は、家庭内暴力を描いた女性

監督 Nicole Umutori.K の作品。深刻なテーマだが、随所にユーモアが挟まれ、子どもたちが「神さま、ママをいじめるパパにどうか罰をあたえて下さい！」と真顔で祈るシーンでは、会場が爆笑に包まれた。

今回が初監督の Nicole は、終始緊張の面持ちだったが、会場の笑いを聞いた瞬間には少女のような笑みがあふれた。Nicole のように、現在 RCC を支えているのは、みな若者だ。多くのスタッフは二十代。映画作り未経験なのはもちろん、社会経験も少なく、大勢の前でのスピーチでは、緊張でどもったりしてしまうごく普通の若者たちだ。彼らが、虐殺後の裁きや和解、生存者の生活、家庭内暴力、麻薬といった問題を、自らの感覚で映像にしてメッセージを発している。映画と社会の良い相互関係に、若者の情熱を映画に変える機会を与える RCC という組織の両者がうまく絡み合った結果が、現在のルワンダ映画祭の活況なのだろう。シネマアフリカでは、こういった作品に映画祭という形で発表の機会を提供し、また小規模ながら配給を手助けすることにより、ルワンダでの映画製作を支援していきたいと考えている。



吉田美穂 (シネマアフリカ 2008 実行委員会)

1974 年東京都生まれ。シネマアフリカ実行委員会代表。東京都立大学大学院在学中、調査のためケニアに滞在。以降も頻繁にアフリカ各地を訪れ、文化や現地事情について執筆。(株)道祖神発行「DoDoWORLD NEWS」でのアフリカレポートは 5 年目を迎え好評連載中。2003 年より「アフリカン・ドキュメンタリー 2003」、「同 2005」などでアフリカ映画祭に携わる。2007 年にはディレクターとして「シネマアフリカ 2007 - ルワンダの記憶 -」を開催。「映像直行便」をコンセプトに、ワガドゥグ、ザンジバル、ケープタウンなどアフリカ各地の映画祭に参加し、作品調査・収集を行っている。また、2007 年より Rwanda Cinema Center と連携し、ルワンダでの映画製作の支援を始めている。

シネマアフリカ 2008 in 横浜 <http://www.cinemafrica.com>

2008 年 5 月 22 日(木) ~ 25 日(日) 横浜情報文化センター 情文ホール

主催 シネマアフリカ 2008 実行委員会

後援 外務省、横浜市開港 150 周年・創造都市事業本部

協力 アフリカ平和再建委員会、他

アフリカ平和再建委員会 (Africa Reconciliation Committee: ARC-JAPAN)

〒160-0004 東京都新宿区四谷4-6-1 四谷サンハイツ511

Tel/Fax: 03-3351-0892 E-mail: headoffice@arc-japan.org ホームページ <http://www.arc-japan.org>

